

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

自給自足への思い

けち臭い話題で恐縮だが、一考に値するように思う。自給自足と言うと、古い時代の狩や農耕の生活を思い起こすが、今さら狩をし、農耕を勧める意図はない。しかし、自給自足は現代の生活でも参考になることが多々あることに気が付く。本稿は生活に必要な物やサービスを得るのに、買うばかりではなく、自ら創り出そうという心掛けを大切にしようという趣旨である。簡単な例を示す。家庭でも職場でもメモ用紙が必要になることがある。紙は身の周りにたくさんあり、片面が白紙で不要のものはよくある。これを廃棄せず、揃えればメモ用紙の束ができる。文具店へ行けばメモ帳などは安く買えるが、買うか自作にするかは個人の判断による。出来るものは自作しようというのが本稿の趣旨である。出費の問題ではない。些細な事だが、価値の創造に当たる。一般に廃物利用は自給自足の好例になる。台所で包丁を使っていると、やがて切れ味が悪くなる。大工仕事が好きな人なら、自分で研いで切れるようにすることができる。新品のように立派に蘇ると喜びを感じる。劣化した道具を修理出来るのは、その趣味の人に限られるであろうが、人それぞれ得意な分野があり、それぞれの得意とする所で価値や効用を高める、これが自給自足的な発想である。綻びた衣類を縫って補修するのもよい。壊れた時計を直すなどは、特別の技術が必要だが、そういうことに喜びを感じる人もいる。物を大切に作る心が育まれる。

狩や農耕の意味を拡大解釈して、価値や効用を生み出し、高める行為を自らなすことは、自給自足と同次元のことと考えたい。唯、これらには得手・不得手の個人差があり、誰でもという訳にはいかないが、心掛け次第で出来ることはたくさんある。こういう発想をすれば、実は誰でも自給自足の行動をとっている。衣類の洗濯、部屋の掃除などを他に頼まず自らすることも価値の更新であり、自給自足に当たる。

近年、「ものづくり」という言葉をよく聞く。生活に必要な物を作ることは太古の昔からあった。たわしなどは簡単にでき、どこの家でも自前でできたであろう。しかし簡単にはできない鍬などの農具や刃物は鍛冶に得意な人にしかできない。鍛冶の技に長けた人は、自家の鍬だけでなく、他家にも供給できるよう多くの鍬を作ることができた。そして必要な人に対価を得て渡したであろう。鍛冶の技は業として成り立った。こうして職人が誕生した。職人はそれぞれ得意な物の製作に技を磨き、多様な職種が生まれ、産業となった。

物創りには道具や動力源が必要になる。昔は人間の手足と筋肉の伸縮によった。農耕には牛馬も使われた。水車は水流の落差を利用したもので、電気が普及する前に広く使われた動力源で、穀物の精製などに用いられた。こうして自給自足が困難な物は、交換などによって入手できることになった。やがて動力と機械化が革命的に発達し、現在に至った。産業の発展で日用品の入手が容易になり、売り手は宣伝に努めている。安く買えるものを自作することは馬鹿げていると考える向きもあるが、自給自足の喜びは損得を超越したものである。こうして自給自足の主体は個人、世帯、集落、地域、国家と範囲を広げてきた歴史がある。同業者の間には競争が生じ、盛衰につながった。

昭和初期の日本の田舎を思い出す。私が生活経験をした百戸に満たない集落でも、過去には農業の他に様々な業の家があって、小規模ながら一つの経済圏をなしていた。商店はない。不足の物は他地域から補った。その集落は今、少子高齢化の波を受けて過疎化し、自給自足の意欲には乏しいように見える。各家には屋号があり、鍛冶屋、桶屋、豆腐屋などと呼ばれている。営業はしていないが過去の産業活動の名残を留めている。社会は進化したと言うべきか、退化したと言うべきか。

私の自給自足といえば例えばメモ用紙作り、広告のピラなど片面が白い紙を揃えて電話機の傍に置いてある。役に立っている。石鹸は、使って薄い小片となっても、捨てないで別の石鹸に重ねて押さえつければ、それと一体になって最後まで無駄なく使える。新しい石鹸を急いで買わなくて済む。物を大切に作る心がそうさせている。石鹸製造会社からは、そんなケチな使われ方をされては売れ行きが落ちるとして嫌われるかも知れない。